

哀傷歌の源氏取り：新古今を継ぐもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 君嶋, 亜紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6179

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



哀傷歌の源氏取り

——新古今を継ぐもの——

君 嶋 亜 紀

はじめに

哀傷歌における『源氏物語』摂取（以下「源氏取り」と称する）は、院政期以降、新古今時代にかけて盛んに試みられ、『新古今集』哀傷部には後鳥羽院や良経らの歌が採られている。以後、十三代集にも散見するが、特異なのは『新勅撰集』『続後撰集』で消えていた哀傷の部立を復活させた『続古今集』である。そこには下命者後嵯峨院の歌「雨となり雲となりにし形見にもまがふ桜の色や見るらん」（一四四七）に列なる形で、『新古今集』哀傷部にみえる後鳥羽院の寵姫尾張哀傷歌を髣髴させる、源氏取りの歌群が見出せる。また、下って南朝の准勅撰集『新葉集』は、撰者宗良親王に関わる源氏取りの贈答歌を三組入集させて目に立つ。本稿では、新古今時代に比してあまり注目されてこなかった十三代集の時代の哀傷歌における源氏取りについて、『続古今集』と『新葉集』を軸に考えてみたい。

一 『続古今集』の方法

『続古今集』については、過去となった王朝の情景を再現しようとした後嵯峨院歌壇の政教性の強さ^①と、その志向とも相俟つて同集が『新古今集』を範としていることが指摘されてきた。その哀傷部も、巻頭に『新古今集』同様、無常詠を、巻軸に『新古今集』の最多入集歌人西行の詠を置き、後鳥羽院（一四〇六～一四〇八、作者は順徳院）・良経（一四一二～一四一四、作者は道家・定家）・定家（一二一九・一四二〇・一四二六、作者は実氏・為家・忠定）・家隆（一二二七、作者は平時直）という新古今歌人を哀悼する歌を並べるなど、『新古今集』とその時代を強く意識した構成になっている。そのなかで、右の後嵯峨院詠を含む、当代歌人たちが身近な女性を偲ぶ歌を並べた歌群（一二四三～一二四七）には源氏取りが見出せる。

母の思ひに侍りけるに、先だちて色なる人のもとにつかはしける

右近大將通雅

はかなくぞおくるる露の身を知らで人のあはれに袖ぬらしける

（一二四三）

「おくるる露」は『源氏物語』宿木巻の歌「消えぬまに枯れぬる花のはかなさにおくるる露はなほぞまされる」以外に索引類では他例の見えない語で、一二四三の初二句はこの歌の三四句によると思われる。物語では匂宮に迎えられた中の君が訪ねてきた薫に返した歌で、「消えぬまに枯れぬる花」は早世した姉大君を、「おくるる露」は中の君自身を指している。作者花山院通雅の母は藤原定高女。母を亡くした通雅は先に喪に服していた人にそのことを伝えるのに、自身の境遇を『源氏物語』の歌語で形容している。この源氏取りには、自身の状況を伝える説明的になりがちな歌意を詩的表現に転換し、かつ相手の共感を呼ぶような機能が認められる。

少将内侍人に草子を書かせ侍りけるを、内侍みまかりて後、ゆかりを尋ねて

つかはし侍りければよめる

安喜門院大式

あはれにぞ露のゆかりを尋ねける消えにしあとに残る言の葉 (一四四四)

「露のゆかり」は歌語としては紅葉賀巻の藤壺の歌「袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ」に見える。ただし、この語を摂取した早い例は『千載集』の、

寄源氏物語恋といへる心をよめる

見せばやな露のゆかりの玉かづら心にかけて忍ぶけしきを (恋四・八七一・読人不知)

という巻名「玉蔓」を詠み込んだ恋歌で、これは玉鬘巻の、右近が夕顔の遣児玉鬘と再会したことを源氏に報告する場面の地の文「はかなく消え給ひにし夕顔の露の御ゆかりをなむ見給へつたりし」から取られている。^③ 続いて後鳥羽院の元久元年(一二〇四)十二月賀茂上社三十首御会の「秋」題の歌に、

野原より露のゆかりを尋ねきてわが衣手に秋風ぞ吹く

(後鳥羽院御集・一二四三、新古今集・秋下・四七一)

があり、以降、中世和歌に散見する語となる。後鳥羽院詠は「秋」題の歌だが、同年十月頃に没した寵姫尾張への哀悼の意があること、右に挙げた紅葉賀巻の藤壺の歌「袖ぬるる…」を摂取していることが指摘されている。^④ 尾張が若宮を残して逝ったことから「やまとなでしこ」が若宮を指す藤壺詠への連想ははたらいというが、同時に「露のゆかりを尋ねき」という表現は右の玉蔓巻の叙述をも想起させるのではないだろうか。眼前にない、いわば幻影の野原から「露のゆかり」の涙を探し求めてやって来た秋風、その風に袖の涙を吹き散らされながら佇む人物には、尾張を喪った後鳥羽院の姿が重ねられる。夕顔と玉蔓の物語をふまえることで、一首に不在のものの面影を追ひ求める趣が加わるように思われる。

涙の喩ともなる「露」の象徴性と、その露のようにはかなく消えてしまった夕顔や遣児玉蔓の面影を髣髴させる「露のゆかり」の語は、哀傷歌に結びつきやすいものであったろう。一四四四は、大式(＝安喜門院大式)がその父藤原為繼(信実の子)の妹である後深草院少将内侍の死後に、内侍の縁者を探し求めて贈った歌で、縁者である相手の存在を「源

氏物語』の語によって形容しており、死後にそのゆかりを尋ねるといふ物語の筋も連想される。さらに二三句「露のゆかりを尋ねける」に、右の後鳥羽院詠の影響も認めておきたい。⁽⁵⁾

続く二首には源氏取りは見えない。

こころざし侍りける女の秋まかりにける、神無月のころ時雨のしける日よみ侍りける

前関白左大臣〈二条良実〉

つらかりし秋さへいまは昔にて涙しぐるる神無月かな

(一四四五)

右大将通雅母まかりてのころ、雪の降りける日よみ侍りける

入道前右大臣〈花山院定雅〉

いかにまたさらでも苔の下なるをかさねてうづむけさの白雪 (一四四六)

一四四五の良実詠は、愛した女性が秋に死に、神無月の頃時雨の日に詠んだといふ詞書の状況が注目される。前述した後鳥羽院の寵姫尾張(法眼顕清女)は、元久元年(一二〇四)七月に院の皇子を生み、十月頃早世した(『源家長日記』に「神無月のころ」、『明月記』十月十九日条に「伝聞、女房尾張寵愛之内、於実快房逝去」とある)。後鳥羽院は水無瀬殿に渡り、「神無月のころなれば、風ひや、かにうち吹きて、曇りわびたる時雨の空も催し顔にやおほしめすらん」(源家長日記)という状況で、「何とまた忘れて過ぐる袖の上にぬれて時雨のおどろかすらむ」等、十首の贈答歌を慈円と交わしている。また、建永元年(一二〇六)七月和歌所当座歌合(後掲「雨中無常」詠と同時)の「寄風懷旧」題の歌でも、「忘れぬかいまはみとせの冬の嵐時雨れし露の袖にまだひぬ」(後鳥羽院御集・一六八二)と、足掛け三年前の尾張の死(「いまはみとせの冬の嵐」で流した涙を「時雨」と詠む。尾張哀傷は初冬の「時雨」の景と結びついており、良実詠の詞書は後鳥羽院の尾張哀傷歌を想起させるものとも捉えられる。

一四四六の定雅詠の「苔の下」(墓の下)を「うづむ」といふ表現は、「もろともに苔の下にも朽ちもせでうづまれぬ名を見るぞかなしき」(金葉集・雑下・六二〇、和泉式部が娘小式部内侍を哀悼した歌)以来よく詠まれる。雪の日に地中

の死者を思う歌で、作者の定雅は一四四三の作者通雅の父であり、一四四三と同じ折の、亡妻を思う歌である。
ここに前述した後嵯峨院の歌が続く。

同じ思ひにて、粟田口の山庄にこもりゐて侍りし春の花のころつかはし侍りし 太上天皇（後嵯峨院）

雨となり雲となりにし形見にもまがふ桜の色や見るらん （一四四七）

前歌と「同じ思ひにて」、すなわち定雅が妻を亡くして花山院家の別荘である粟田口の山庄に籠っていた折に、後嵯峨院が定雅に遣わした歌である。定雅詠に続けてその意をとれば、雪の日に亡妻を思つて詠歌したあなたは今、春の雲に見紛う桜の花に、雨となり雲となった亡き人を重ねて見ていることだろう、となるう。初二句は朝雲暮雨の故事をふまえるが、一四四三や一四四四（後者は「露のゆかりを尋ねける」と詠み後鳥羽院詠をも髣髴させる）の源氏取りと、一四四五の「時雨」が序章となつて、同じ故事をふまえる『源氏物語』の次の歌々の情感が手繰り寄せられる。

a 見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつまじきかな （夕顔卷 光源氏）

b 雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ （葵卷 頭中将）

c 見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ （葵卷 光源氏）

aは夕顔の死後、静かな夕暮に、眼前の雲に夕顔の火葬の煙を思う源氏の独詠歌、bは葵の上の死後、「時雨うちしてもあはれなる暮つ方」、葵の上を思い「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」と独りこつ源氏に、頭中将がやはり独り言のように詠みかけた歌（歌の後に「行く方なしや」と続く）で、cはそれに唱和した源氏の歌である。さらに後嵯峨院の一四四七は、同じ源氏の場面をふまえた『新古今集』の後鳥羽院詠、

雨中無常といふ事を

なき人の形見の雲やしをるらむ夕べの雨に色は見えねど （哀傷・八〇三）

と、「雨」「雲」に加えて「形見」の語と第五句の用語が重なる。八〇三は前述した建永元年（一二〇六）七月の、尾張が

後鳥羽院の皇子を生んで二年という時期に、後鳥羽院が主催した和歌所当座歌合の「雨中無常」題の歌（後鳥羽院御集・一六八三）で、右の a c をふまえて尾張哀傷の思いを詠み込んだと見なされている。^⑦源氏の c では、夕暮の空は時雨にかき暗され、死者の形見の雲はそれと見定められない。後鳥羽院もそこに注目し、「色は見えねど」と詠む。^⑧見えないからこそ、眼前の雨の向こうに存在するはずの形見の雲に泣き萎れる死者の面影がありありと重ねられるのだろう。

後嵯峨院はさらに「色や見るらん」と反転する。桜を雲に見立て、そこに死者の面影が重ねられるかと問うている。この桜は、雲に見紛う山の端の桜であろう。一首の視線は源氏や後鳥羽院詠同様、上空にあるが、夕の雨（時雨）を詠む両者とは空の色が違う。亡妻を思う定雅の山庄から眺められる遠山の桜、その春景色を悲傷に染めるような詠み方である。雲を桜に置換することで、雲を死者と見る哀傷歌に新たな情景を加えたものといえよう。

後嵯峨院の歌は、はじめに見た定雅の子通雅の一四四三と哀悼対象および源氏取りという共通項によって呼応する。源氏取り（一四四三・一四四四・一四四七）、時雨の情景（一四四五）、同じ哀悼対象（一四四三・一四四六・一四四七）という密接なつながりをもって、『源氏物語』の面影を漂わせつつ亡き女性を哀悼するこの歌群は、最終的に後嵯峨院の向こうに、尾張を哀悼する後鳥羽院の姿を浮かび上らせるように配置されていると捉えられるのではないだろうか。

こうした配列には、後嵯峨院の意図が反映されていると考えられる。『続古今集』は正嘉三年（一二五九）為家に撰進が下命されたが遅延、弘長二年（一二六二）撰者に真観ら四名が追加され、文永二年（一二六五）四月までに五人の撰者が撰者進覧本を提出（撰者のうち家長は前年九月に没しており、遺された草本を子の経平が提出した）、同四月二十八日以降、後嵯峨院の「御前評定」という異例の形で、撰者四人と関白良実（一四四五作者）ら高官の歌仙四人がメンバーとなって撰歌・配列について評議したとされる。^⑨また本節冒頭で述べた『続古今集』の『新古今集』継承の志向に関して、後嵯峨院が後鳥羽院の時代を聖代と位置づけ模倣していたという指摘がある。^⑩『続古今集』哀傷部は、その構成や顔触れにおいて『新古今集』を意識した枠組を設定したうえで、当該歌群（一四四三―一四四七）によって後嵯峨院を後鳥羽院

と重ねるという形で新古今時代志向を示していると捉えられよう。後嵯峨院の姿が後鳥羽院を介して『源氏物語』を髣髴させることは、後嵯峨院宮廷の『源氏物語』再現志向が後鳥羽院享受の姿勢とも関わることを示唆していると考える。

二 雲・煙・露の情景——十三代集（1）

十三代集では『続古今集』の他に『続千載集』『続後拾遺集』『新千載集』『新拾遺集』『新続古今集』の五集が哀傷の巻を有し、他の七集は雑の巻の一部に哀傷歌を収める形になっている。管見では今のところ『続古今集』のような意図的な歌群は見出せていないが、ここで題材・配列・作者等、十三代集の哀傷歌における源氏取りの傾向を概観してみる。まず散見するのは、雲と煙の情景である。

① 見し人の昨日の煙けふの雲たちもとまらぬ世にこそありけれ

（風雅集・雑下・一九九六 宗尊親王）

② なき人のうはの空なる形見かな煙となりし夕ぐれの雲

（新千載集・哀傷・二二四一 大江頼重）

ともに題不知の歌で、死者が煙となり雲となるという発想と、①では初句、②では「夕ぐれの雲」を見るときという設定が、夕顔巻の歌「見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつまじきかな」（前掲a）を髣髴させる。^①さらに②には須磨巻の「なき人の別れやいと隔たらむけふりとなりし雲^ゐならでは」（大宮）の語も見え、『源氏物語』の語句を複数取り合わせて詠んだものと捉えられる。同時に②の「なき人の」「形見」の語には、後鳥羽院の尾張哀傷歌「なき人の形見の雲やしをるらむ夕べの雨に色は見えねど」の影響もみてとれよう。同詠には次のような影響歌も見出せる。

なき人の形見の雲やしぐるらん又袖ぬらす神無月かな

（親清五女集・三九三）

詞書によれば、嵯峨の法輪寺に参詣した「神無月の十日あまり」の「時雨うちそそく空のけしき物あはれなる」日に、この季節に亡くなった人をもって詠んだ歌で、その状況も尾張哀傷歌、および前掲bの葵の上哀傷場面状況「時雨うちし

てものははれる暮つ方」と共通している。こうした影響歌の存在は、後鳥羽院以後の歌人が夕顔卷や葵卷の当該場面を撰取する際、同時に後鳥羽院詠も想起したであろうことを想像させよう。

一方、『風雅集』では①（二九九六）の前後に次の二首が並べられている。

従三位守子なくなりけるころ

院御歌〈花園院〉

目に近き人のあはれにおどろけば世のことわりぞ更になしき

（一九九五）

朔平門院かくれ給ひて後よみ侍りける

永陽門院左京大夫

残りゐて思ふもかなしあはれなど燃えし煙に立ちおくれけん

（一九九七）

一九九五の「目に近き」の語は若菜上巻の紫上の歌「目に近く移ればかはる世の中を行く末とほくたのみけるかな」と通じる。この語は『源氏物語』以前に『簞集』一六や『拾遺集』一一一六等の先例があり、また岩佐美代子氏は従三位守子死去について語る『花園宸記』元亨二年（一二三二）十一月八日条の記事を挙げて、一九九五はその一節「眼前無常尤足悲歎」をそのまま歌にした趣とするが、この歌が①と並ぶと『源氏物語』が想起されないだろうか。一方、一九九七の「燃えし煙」は、須磨巻で須磨退去を決意した源氏が出立前、左大臣邸に別れを告げに行つた場面で詠んだ歌「鳥辺山もえし煙もまがふやと海人の塩やく浦見にぞ行く」に見える。この語も『源氏物語』と同時代の歌に、「思へ君燃えし煙にまがひなで立ちおくれたる春の霞を」（新古今集・哀傷・八二一・源三位¹³）と見える語で、「立ちおくれ」の語も重なることから、一九九七は直接的にはこの源三位の歌によつていと思われ¹⁴るが、やはり①と並ぶことで『源氏物語』の先例に気づかされるだろう。『風雅集』は①の宗尊親王詠を軸に、「目に近き」「燃えし煙」と『源氏物語』に見える語をいわば縁語的に並べることで『源氏物語』の面影を強めようとしてい¹⁵る¹⁶と考¹⁷える。一九九五〜九七の三首に、縁語的配列による源氏取りの顕在化という方法を見出しておきたい。一九九五の作者花園院は『風雅集』撰集に監修者として関与しており、この配列の意図を承知していたと思われ¹⁸る。

なお、夕顔に関連して前節で『続古今集』の大式の「露のゆかり」詠に言及したが、『続後拾遺集』哀傷部の「露」を詠む歌群（一二四六～五一）中の大式の歌にも同じ語が見える。

③ 母の思ひにて侍りける時、藤原景綱がもとに申しつかはしける 前大僧正禅助

忘るなよはその森は枯れぬとも下葉に残る露のゆかりを （一二四六）

返し 藤原景綱

枯れにけるははその杜の露までもゆかりときけば涙落ちけり （一二四七）

なき人をとぶらひ侍りける時よめる 安喜門院大式

あだにのみ消えにし露のゆかりとて昔をとふも涙なりけり （一二四八）

一二四六は作者禅助が母・内大臣源通成室（宇都宮頼綱女）の死後、母の縁者にあたる景綱（頼綱息泰綱の子、禅助とは従兄弟）に贈った歌で、「柞の森は枯れぬ」で母の死を、「下葉に残る露のゆかり」で残された自身を表している。前述した大式の詠同様、これも夕顔にまつわる語を意識したもので、夕顔が玉蔓を残して死去したという物語の母子関係も投影されていると思われる。一方、大式の一二四八は故人を「あだにのみ消えにし露」と表現し、その「ゆかり」（縁者）を弔問した歌で、禅助詠と並んでいなければ『源氏物語』を想起する必要はない詠みぶりともいえよう。「露のゆかり」の語は、『源氏物語』をさほど意識せずに用いられる、一般的哀傷歌の語になっているとも考えられる。

三 東国という視点——十三代集（2）

前節③の作者禅助は宇都宮氏の血を引き、①の宗尊親王は鎌倉将軍、②の大江頼重は六波羅評定衆とともに東国関係者であった。次の贈答歌の作者行済と源承も東国と縁がある。

④ 昭訓門院小督が母身まかりにけるを歎きける比、生処夢に見ることや侍ると法眼源承もとより

とひて侍りければ

法眼行濟

歎きわびうち寝るひまもあらばこそ亡き面影を夢にだに見め

返し

法眼源承

まぼろしにかよふばかりの道もがなまどろむ程のひまはなくとも

(新千載集・哀傷・二二五八、二二五九)

行濟は仁和寺法眼として、③の禪助と同時期に仁和寺御室性助法親王に仕え、為氏、為世、源承、定為ら二条家の歌人と親交があった。⁽¹⁵⁾東国に下向したことがある(新千載集・羈旅・八〇九)。性助法親王が入滅した折、その歌壇に参加していた為氏、源承、禪助、道洪法師がみな行濟のもとに哀傷歌を贈っていることから、行濟は法親王のもとで歌壇の取りまとめ役のような立場にあったと推測される。また、源承は自身が病に伏した折、「相伝の文台」を行濟に贈っており(続後拾遺集・雜中・一〇八九、一〇九〇)、歌人行濟への信賴は篤かったと思われる。なお源承の母は頼綱女で、禪助とは母同士が姉妹になる。その源承が、昭訓門院小督(行濟女、続後拾遺集等には「法眼行胤妹」として見える)の母、すなわち行濟の妻の死後に示した弔意をきっかけに交わされた贈答歌である(同じ折の為氏との贈答歌が新千載集・哀傷・二二六三、二二六四に見える)。

源承詠の「まぼろし」は贈歌の「夢」の縁語だが、ここでは『長恨歌』に見える、故人のもとに行き通う幻術士(道士)の意に転じ、上句の表現に、『長恨歌』をふまえた桐壺巻の、桐壺更衣を哀傷する桐壺帝の歌「たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」と、それと呼応するように亡き紫の上を思う光源氏の幻巻の歌「大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ魂の行く方たづねよ」を取り込んでいる。行濟詠の「夢にだに見め」から源氏の「夢にだに見えこぬ」を連想したものでだろうか。また「うち寝る」の語を含む「思ひあまりうち寝る宵のまぼろしも浪路を分けて行きかよひけり」(千載集・恋五・九三六・鴨長明)も脳裏に浮かんでいたかもしれない。歎きのあまり眠れず、死後の妻

を夢に見ることもないという相手をも、桐壺帝や光源氏に重ねて慰めている。

鎌倉期に哀傷歌において源氏取りを行った人々として東国関係者の一群が浮上してくることは、鎌倉における『源氏物語』研究の隆盛と連動していると考えられないだろうか。たとえば次の例は、『源氏物語』をめぐる研究と撰取と哀傷の接点を体现している。

⑤ 源親行身まかりて後の遠忌に義行すすめて、源氏物語の巻巻を題にて人人に歌よませ侍りける時、

桐壺の巻の心を

前参議能清

かぎりとしていしなげきにくらべてもながき別は猶ぞかなしき

おなじ時、横笛を

寂恵法師

笛の音をながき世までにつたへずはむなしくなりし人や恨みん

(新統古今集・哀傷・一六〇三、一六〇四)

河内本源氏物語の校訂者である親行(没年未詳)の遠忌に『源氏物語』の巻名を題として詠歌したというこの催しことは、早く寺本直彦氏に取り上げている。^{①7} また作者の能清については中川博夫氏に、^{①8} 寂恵については久保田淳氏に詳細な論考がある。それらによると、光行の子親行は、鎌倉で源実朝・藤原頼経・宗尊親王という三代の將軍のもとで歌人として、『源氏物語』師範として活動した。義行はその親行の子で、能清とは右の催し以外にも和歌の贈答が認められる(新千載集・冬・七〇六、七〇七)。能清は、源頼朝の妹を娶った一条能保の曾孫、関東との縁が深い一族の出で、北条時房の女を母とし、自身、頼経將軍時代の幼少期から鎌倉に下向している記事が見える。歌人として宗尊親王を中心とする鎌倉歌壇の活況を支えた。寂恵は俗名安倍範元、陰陽師として鎌倉に下り、宗尊親王近侍の歌人として活躍した。出家遁世ののち、為家・為氏に師事している。以上⑤の登場人物はみな鎌倉関係者であり、鎌倉歌壇での催しと推定されている。

巻名「桐壺」「横笛」を題とした二首はそれぞれ、桐壺更衣の死と柏木の死を詠んで源氏学者親行を供養する歌としたものだろう。^{②0} 能清詠の「かぎりとしていしなげき」は、桐壺巻で病を得て宮中を退出する折に桐壺更衣が帝に残した歌

「かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり」を指す。死を予感して別れたその折の歎きと比しても、永別はいっそう悲しいと、鞍負命婦の更衣母君弔問や桐壺帝の「まぼろし」詠など、桐壺巻の哀傷風景を想起しつつ詠んだものであろう。寂恵詠は横笛巻の柏木遺愛の笛をめぐる夕霧の歌「横笛の調べはことにはあらぬをむなしくなりし音こそつきせね」と、夕霧の夢中に現れた柏木の歌「笛竹に吹きよる風のことは末の世ながき音に伝へなむ」に拠る。その遺品を子孫に伝えてほしいと願う死者柏木に亡き親行を重ね、その生前の業績を後世まで継承していこうという詠であらう。遠忌とあつて死別を悼む前者の詠みぶりは穏やかで、源氏学の継承を誓う後者のほうに、詠歌の場の状況とも合つてより実感があるようにも思われる。

柏木は女三宮との密通の果てに早世した。鎌倉時代初頭の『無名草子』はその死を「いとあはれなり」としつつ、「いとをかしかりし人の、女三の宮の御事さしも命に換ふばかり思ひ入りけむぞ、もどかしき」と非難もする。哀切であり愚かである、という柏木享受の視点を見出せよう。この柏木の報われぬ恋を象徴するかのような柏木巻の次の三首、

いまはとて燃えむけぶりもむすほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ (柏木)

立ちそひて消えやしましうきことを思ひみだる煙くらべに (女三宮)

行くへなき空のけぶりとなりぬとも思ふあたりを立ちをはなれじ (柏木)

も十三代集の哀傷歌に取り入れられている。

ともなへりける女の身まかりにける時よみ侍りける 権大納言長雅

⑥ 時のまもたちや離れし今はとてそはぬ煙のはてぞ悲しき (続拾遺集・雑下・二二四)

法仁法親王かくれさせ給うける比よみ侍りける 法橋行経

⑦ 立ちそひてともに行くべき道ならば煙とならむ身ををしまじ (新千載集・哀傷・二二五二)

⑧ は花山院長雅の妻の死を悼む歌で、「たち離れ」「今はとて」「そはぬ煙」の語が柏木巻に拠っている。⁽²¹⁾長雅は『続古

今集』で源氏取りの見た一四四三の作者通雅と兄弟、一四四六作者定雅の子である。⑦の「立ちそひて」「煙とならむ」と文末の「くじ」の語も柏木巻を想起させる。ともに前述の夕顔巻をふまえた①②同様「煙」を詠むが、詠みぶりは異なっている。煙に重ねられた死者の面影は生々しく、その煙に立ち添って同じ煙になりえなかったことを悔やむ作者の身体性が感じられる。こうした詠みぶりの奥底には、思うようにならない恋に陥った柏木の執心と悔恨が沈潜しているのだらう。柏木の恋が有していた不義の側面は捨象され、若くして恋のために死ぬ悲劇という要素が抽出されて、「立ちそひ」「立ち離れ」という柏木の物語を象徴する語句とともに、死者を恋い慕う思いの深い者によって用いられていると捉えておく。

以上、十三代集の哀傷歌では、「煙」「雲」「露」「幻」といった哀傷歌にふさわしいモチーフが、多くは『源氏物語』の死に関わる場面を典拠として、物語の情景をふまえ、あるいはその面影を揺曳させつつ用いられていることをみてきた。

『源氏物語』は哀傷歌にふさわしい歌語や情景を提供するものとして、いわば歌語辞典ないし哀傷歌の詠み方の実例集と化していくと位置づけられそうである。「詞につきて不審をひらくかたは、源氏物語にすぎたるはなし」（『八雲御抄』第六・用意部）という方向に進んだとも考えられる。そのなかで、先の『続古今集』と並び、この時代に特異な源氏取りを示す集として注目されるのが『新葉集』である。

四 『新葉集』の方法

南北朝末期に南朝で生まれた『新葉集』は准勅撰集と称されるが、京の北朝で『風雅集』『新千載集』『新拾遺集』と続いた撰集事業に対抗して勅撰集をめざしたものであり、その部立や構成意識は勅撰集を志向している。同集哀傷部には三組の源氏取りの贈答歌が見出せる。そのうち二組は撰者宗良親王の子の死に関わる歌である。

長月の末つ方、病重く成て、今は限に成ぬるよし申おこせ侍しついでに よみ人しらず

いかに猶涙をそへて分けわびん親に先だつ道芝の露 (一三八七)

返し 中務卿宗良親王

我こそは荒き風をもふせぎしに独や苔の露はらはまし (一三八八)

是を見て、次の日の朝、つひになく成にけるとなん

歌意から臨終に際した子とその父宗良親王の贈答歌とわかる。さらにこの直後であろう、子を亡くした宗良親王は関白左大臣(二条教頼)に弔問されている。

中務卿宗良親王歎事侍し神無月の比、常よりも時雨がちにて物あはれに侍し夕つ方申おくり侍し 関白左大臣

よそに聞く我だにはさぬ涙哉おくる、袖は猶やしぐる、 (一三五九)

返し 中務卿宗良親王

時雨より猶定なく降る物はおくる、親の涙なりけり (一三六〇)

東国や北陸を転戦し、長年信濃大河原に滞在していた宗良親王は、六十四歳の文中三年(一三七四)冬、長慶天皇の時代に大河原を発して吉野に帰山した。親王と長慶天皇のもとで南朝歌壇は活況を呈し、『新葉集』撰集に着手、途中で親王は天授三年(一三七七)冬に一度信濃に帰った。二組とも、親王が吉野帰山時に持参したと想定されている『李花集』⁽²²⁾には見えない歌で、関白左大臣に弔問されていることから、親王の子の死はこの吉野滞在中のことと考えられる。

この子について具体的なことはわからない。古く『南山巡狩録』『桜雲記』『南方紀伝』等は興良親王とし京都で没したと伝えていたが、川田順が興良親王は護良親王の子で、この頃には三十歳以上になっているとして否定、右の歌意より若年の御子で、読人不知として載せられたのも立親王以前ゆえと推定した。さらに小木喬氏は『新葉集』の詞書から、親王は天授二年四月の内裏歌合の頃信濃に帰ろうとしていたが(五二五)、「思ひのほかに」吉野にとどまり、翌三年冬に信濃に下向した(五二六)、この「思ひのほか」のことが王子の死で、その死は天授二年九月末と推定する。⁽²⁴⁾川田氏は大河原

に残してきた子、小木氏は親王が吉野へ連れてきた子が何らかの理由で親王と離れていた折に吉野で死去したものとする。子の死が原因で親王が帰信を延期したのならば、吉野に連れてきた子と考える方が自然であろうか。いずれにしろ遠方にいて死に直面している幼い子と交わした歌である。

子の歌の「親に先だつ道」は、小式部内侍が重病の床で母親の和泉式部に向かって、「いかにせむいくべき方も思ほえず親に先立つ道を知らねば⁽²⁵⁾」と詠み、その歌に神明が感謝して病は治ったという伝承をもつ歌の語で、説話的な色彩を帯びている。『新葉集』でも撰者宗良親王自身が記したと思われる左注がつき、歌語的な趣をもつ贈答となっている。ただしここでは命を救ってくれる神明は現れず、親の返歌を見て力尽きたように亡くなっていることが、歌により生き返ったという伝承と比してより哀れを催すように思われる。宗良親王の返歌の傍線部は、『源氏物語』桐壺巻の「あらし風ふせぎしかげの枯れしより小萩がうへぞ静心なき」による⁽²⁶⁾。桐壺更衣の母君が桐壺帝に返した歌で、「あらし風ふせぎしかげ」は亡くなった更衣を、「小萩」は残された若宮を指す。若宮を守っていた更衣の姿に、長年地方に滞在し、南朝の勢力振るわずという逆境の中、子を守ってきた親王自身の状況が重ねられているのだらう。秋と露というモチーフも桐壺巻と通じる。状況の類似を基盤として物語の内容に踏み込んだ心境で源氏取りがなされている。さらに親王の歌の口吻は、後鳥羽院が隠岐の配所で詠んだ歌「われこそは新嶋守よ隠岐の海のあらし浪風心してふけ」(遠島百首・九七)⁽²⁷⁾をも想起させる。今は遠方にいて手を出せないもどかしさが遠島で詠まれた後鳥羽院の歌を引き寄せたものと考ええる。家隆の隠岐の後鳥羽院を思う述懐歌群中に「あらし風ふせぎし宿も荒れはてて月や夜ごとにもりかはるらん」(壬二集・三〇七六)の先行例があることも、桐壺巻の歌と後鳥羽院を結びつける補助線にならう。

関白左大臣(二条教頼)の弔問歌の語「おくる袖」は早く『斎宮女御集』や『拾遺集』三二三に離別の歌語として見え、以降も旅の場面での使用が散見する。一方、この語を哀傷に用いた初例が葵巻の、葵の上を亡くした光源氏に六条御息所が贈った歌「人の世をあはれと聞くも露けきにおくる袖を思ひこそやれ」であり(他に新千載集・哀傷にも公雄の

例がある）、教頼は親王詠「我こそは」の源氏取りをふまえて、自身も『源氏物語』の哀傷場面の語を用いたのではないかと推測する。また、教頼詠詞書の点線部は、一節で後鳥羽院の「なき人の」詠に関して引いた葵卷の哀傷場面の描写「時雨うちしてものはれる暮つ方」と似通う。この詞書も撰者宗良親王の意図を示すもので、教頼詠の源氏取りを浮き立たせ、先の自詠と併せて王子の死を『源氏物語』の情感と重ねて語ろうとしていると考える。

もう一組の源氏取りにも宗良親王が関わっている。『新葉集』編纂に助力した花山院長親も親王と同じく幼い子に先立たれていることが、同集哀傷部の巻軸に置かれた次の歌からわかる。親王の子の死との前後関係は不明だが、やはり親王の吉野滞在中のことと思われる。

右近大將長親いときなき子におくれて侍し比、しをれたる撫子につけてつかはし侍し

中務卿宗良親王

よそへつ、思やるこそ悲しけれかくやしをれし撫子の花

(一三九二)

返し

右近大將長親

よそへつ、見ればしをる、我袖にかけじやさらに撫子の露

(一三九三)

幼い子を亡くした長親に宗良親王が贈った一三九二は、平安中期、恵子女王（醍醐天皇皇子代明親王の女、藤原伊尹室）が顔を見せないわが子藤原義孝に贈った歌、

贈皇后宮に添ひて春宮に侍ひける時、少将義孝久しくまゐらざりけるに、なでしこの花に付けて

つかはしける

恵子女王

よそへつ、見れどつゆだに慰まずいかにかすべきなでしこの花

（新古今集・雑上・一四九四、義孝集・七三Ⅱ第四句「いかがはすべき」）
から、撫子の花につけて歌を贈るという行為と、一・五句という歌の骨格を踏襲している。恵子女王がわが子に注いだ愛情の深さを重ねつつ、長親の心境を思いやった歌で、撫子によそえられた義孝がのちに早世していることも、親王がこの

歌を連想し摂取した背景にあったであろう。この一・五句の表現は、紅葉賀巻で光源氏が藤壺に贈った歌、

よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花

にも見出せる。藤壺が源氏との間の若宮を出産した後、源氏が前栽の撫子を折って、命婦の君を通して藤壺に贈った歌である。一・五句と「見る」「露」「慰む」の語を恵子女王の歌に拠り、撫子の花につけて贈る行為も踏襲している。二人の間に生まれた若宮を撫子の花になぞらえたもので、藤壺の返歌は先掲（一節）の「袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ」である。恵子女王の歌を『新古今集』に撰入した撰者たちは、『源氏物語』の重要な場面に取り入れられた歌であることも意識していたであろう。一方、不義の子にまつわる場面の源氏取りを贈歌の段階で宗良親王が積極的に打ち出そうとしていたかは微妙なところだが、受け手の長親は返歌で親王の贈歌の一・五句を、「花」を涙を表す「露」に変えて踏襲する。「撫子の露」は帚木巻で夕顔が撫子の花に添えて頭中将に贈った歌「山がつの垣は荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露」にみえる語（この「撫子」はのちの玉蔓を指す）であり、長親が物語中のもう一人の「撫子」で「露のゆかり」である玉蔓を連想した可能性はあろう。加えて「かけじやさらに」という、『源氏物語』の歌「身をなげむふちもまことのふちならでかけじやさらにこりずまの波」（若菜上・朧月夜）にしか見えない語を取り合わせている。これは長親が『源氏物語』を引き寄せ、源氏取りの贈答歌であることを明確にしたものとも捉えられる。以上、一三五九・一三六〇は冬の哀傷歌群のはじめに、他の二組は卷末の子の死を悼む歌群のはじめと終わりに配されている。

『新葉集』哀傷部には贈答歌が十三組と多いことが指摘されているが、そこには以上三組の、当代の主要歌人が源氏取りにより物語化された文脈で天折した子を思う歌が含まれる点でも注目される。このうち一組は巻軸歌だが、哀傷部を有する勅撰集でその巻軸に贈答歌を置くものは、八代集では『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』『千載集』とあるものの、以降では『新千載集』のみとなっている。これは『新千載集』が撰者二条為定の姉妹の贈答歌（二二七四・二二七五）を置

いて『千載集』以来の巻軸贈答歌を復活させたものと捉えられる。こうした状況で源氏取りの贈答歌を巻軸に置いた『新葉集』の、いわば源氏取りの優遇は目に立つものといえよう。

五 南朝宮廷の源氏志向

長親との撫子の贈答も、前二組同様、宗良親王が吉野に帰山し詠歌活動を通して長親と交流していた時期——文中三年（一二七四）冬から天授三年（一二七七）冬の間——のものと思われる。萎れた撫子に付けていることから夏秋の詠作であろう。天授元年（一二七五）ならば『南朝五百番歌合』の催行された年、同二年ならば、先に親王の子の死は同年九月末という推定を挙げたが、長親の子と相次いで親王の子も没したことになる。同年晩夏、吉野では長慶天皇が『天授千首』を発企し、詠進が開始されたものの、親王は「いささかさはる事侍りて」（宗良親王千首跋文）詠進を辞退、翌三年春に詠進した。また長親も二年中は病中で詠進を辞退、三年春快方に赴き詠進している（書陵部蔵竹柏園旧蔵本耕雲千首奥書）⁽²⁹⁾。この時の長親の病気は子の死と関係あるだろうか。また天授三年の詠ならば、『天授千首』詠進後、親王が長親の歌才を「此山の中をみ申にも御兄弟ならでは此道の行末もたのもしき事も私には候はねば」（前掲耕雲千首付載の宗良親王消息）⁽³⁰⁾と称揚した頃の贈答ということになる。天授二年か三年の詠である可能性が高そうだが、断定はできない。しかし以上三組の贈答歌は吉野行宮で宗良親王を軸に一、二年の短い間に集中して詠まれたものであるといえよう。長慶天皇の時代である。

南朝は皇統回復の宿願と結びついて『源氏物語』との関係が深い⁽³¹⁾。それは後醍醐天皇に由来するもので、後醍醐天皇が延喜天曆の聖代を親政の理想に掲げて『源氏物語』を重視したことは、同物語の講釈や秘説の伝授、本文や注釈の収集⁽³²⁾、『河海抄』との関係や年中行事復興等⁽³⁴⁾、さまざまな事績に抛り論じられてきた。三代目の長慶天皇が、後村上天皇の前代

にはあつた京都侵攻もなくなり、南山に逼塞する情勢の中で源氏物語注釈書の『仙源抄』を——後醍醐天皇の遺品であつたと推定される河内方の三注釈書『水原抄』『紫明抄』『原中最秘抄』や定家自筆本源氏物語を用いて——まとめたのは、改めて後醍醐天皇の跡を継承する意志を示し、南朝の正統性を主張したものと考えられよう。

『仙源抄』は『新葉集』と同じ弘和元年（一三八一）冬に成立した（跋文による）。長慶天皇は源氏字を探求する一方で、同時期に源氏取りの実践にも意欲的であつたと思われる。『新葉集』に残された源氏取りの詠歌も長慶天皇周辺に集中している。仮にいま、同集の源氏取りの分布を探るために、和歌文学大系44『新葉和歌集』³⁶の脚注・補注で本歌や参考歌を含め、何らかの形で『源氏物語』に言及するものを列挙してみると（以下、部立と歌番号を挙げる。下線を付したものは贈答歌）、

秋上（二五一）、冬（四四〇・四六三）、離別（五〇九・五一〇）、恋一（六四五・六七九）、恋二（七四七・七七〇）、
恋三（八五五・八六五）、恋四（八七四・八七八・八九八・九一七・九二六・九二八・九四七）、恋五（九五五・九八〇・九八八・九八九・九九〇）、雑中（一一七二）、雑下（一二五〇・一三〇七）、哀傷（一三五九・一三八八・一三九二・一三九三）

以上三十首で、部立では恋の部、とくに恋四・五に多く、贈答歌三組は哀傷部に集中している。作者の内訳をみると、天皇家（尊良親王2、後村上天皇2、長慶天皇3、宗良親王3〈他に読人不知として2〉）と花山院家（師賢3、家賢1、長親母1、長親1、師兼1／以上、数字は歌数）で過半数を占める。『新葉集』には撰者の宗良親王と撰集助力者長親に関わるこの両家の歌が多く、撰集資料に偏りが指摘されることから当然の結果ともいえるが、とくに長慶天皇の時代に多く見えることは注目してよいだろう。右に挙げた天皇自身の三首と宗良親王の三首（天授千首の一首と前掲哀傷歌の二首）、および長親・師兼の各一首に加え、長慶天皇中宮2、関白左大臣（二条教頼）2（建徳二年〈一三七二〉教頼家三百番歌合と前掲哀傷歌の詠）等も長慶天皇の時代の歌と考えられる。このうち長慶天皇の二首と中宮の一首は各々「源氏物語の

所々をよませ給ける御歌の中に」(五一〇・九二八)、「源氏の物語の言葉にてよませ給うける御歌の中に」(二五一)という詞書を有し、『源氏物語』の内容や表現を詠んだ歌で、長慶天皇が源氏取りを行う場を催行していたことが知られる。前述のように、哀傷部の三組の贈答歌もすべて長慶天皇の時代のもので推定される。この三組は源氏取りを励行し、やがて『仙源抄』を生んだ長慶天皇宮廷の源氏愛好の機運を反映したものと位置づけられよう。なお、花山院家の人々にも、後醍醐天皇の近臣師賢以来、代々源氏取りの作例を見出せる。哀傷歌三組のうち巻軸に置かれた長親詠には、花山院家の伝統を主張する側面もあると思われる。

哀傷歌には一部の無常詠を除き、あくまで現実の死に即して詠まれたものという枠組がある。そうした制約を負いつつ、『新葉集』撰集過程で生じた撰者周辺の幼い子の死に即して詠まれ、撰入された三組の源氏取りの哀傷歌の存在は、南朝宮廷が『源氏物語』を重視した後醍醐天皇の末裔であることを顕示しているとも捉えられる。同時に、勅撰集と比較すれば、源氏取りを含む贈答歌を複数収めた先蹤として『新古今集』が浮上してくる。後鳥羽院やその尾張哀傷歌、恵子女王の新古今入集歌等、同集を想起させる断片を積み重ねて、物語世界に現実を重ねる摂取や王朝を演じるような表現を試みている『新葉集』哀傷部の歌に、末代の『新古今集』継承者の姿を見出しておきたい。

おわりに

本稿では新古今以後——十三代集の哀傷歌における源氏取りを概観し、『続古今集』『新葉集』という、源氏取りをめぐって特異な様相を見せる二集に注目した。『続古今集』哀傷部の源氏取りには後嵯峨院を後鳥羽院と重ねるという意図があった。『新葉集』哀傷部の源氏取りには長慶天皇宮廷の源氏愛好の機運と連動して、後醍醐天皇の源氏重視を継承する意図と、『新古今集』志向を見出せると考えた。共通するのは『新古今集』を意識した場合に源氏取りは特異な傾向を示すと

いうことである。源氏取りによってその勅撰集を生んだ宮廷の政治的志向が示される——ここに源氏取りの一つの中世的展開を見出せよう。

注

- (1) 佐藤恒雄「後嵯峨院の時代とその歌壇」(『藤原為家研究』笠間書院、二〇〇八年、初出＝一九七七年五月)。
- (2) 家郷隆文「続古今和歌集研究——その外形をめぐって——」(『国語国文研究』一九五七年四月)、安田徳子「続古今和歌集の性格——政教性について——」(『中世和歌研究』和泉書院、一九九八年、初出＝一九八三年十二月)等。
- (3) 新日本古典文学大系『千載和歌集』(片野達郎・松野陽一校注、岩波書店、一九九三年)。
- (4) 藤平泉「新古今時代の哀傷歌(1)——後鳥羽院尾張哀傷歌群を中心に——」(『神女大國文』一九九一年三月)。なお、早く『八代集抄』が「源氏紅葉賀巻に袖ぬる、露のゆかり、とよめる詞斗を用て、心はかへさせ給へるにこそ」と、藤壺詠撰取に言及している。
- (5) なお、木船重昭『続古今和歌集全注釈』(大学堂書店、一九九四年)が、一四四四について後鳥羽院詠を「本歌ないし証歌」として挙げている。
- (6) 木船氏注(5)前掲書。なお、初二句には雲と雨が逆だが後嵯峨院同様「形見」や「色」を詠む「雲となり雨となりても身こそばむなしき空を形見とや見む」(新勅撰集・恋三・八三〇・小侍従)、「雲となり雨となりてや竜田姫秋の紅葉の色をそむらん」(続古今集・秋下・五一四・俊成、長秋詠藻・五五二)の先例もある。
- (7) 藤平泉「建永元年七月『和歌所当座歌合』前後」(『神女大國文』一九九九年三月)。
- (8) 渡部泰明「源氏物語と中世和歌」(『国文学 解釈と鑑賞』別冊「文学史上の『源氏物語』」一九九八年六月)に、これは源氏の歌に内在する、雲に死者を見ることがの幻影性をあらわにする方法だという指摘がある。
- (9) 佐藤氏注(1)前掲書、五九三～六四八頁(初出＝二〇〇四年九月、二〇〇五年四月)。
- (10) 佐々木孝浩「後嵯峨院歌壇における後鳥羽院の遺響——人麿影供と反御子左派の活動をめぐって——」(和歌文学論集10『和歌の伝統と享受』風間書房、一九九六年)、田渕旬美子「流謫の後鳥羽院——『続後撰集』以降の受容——」(『国文』二〇〇一

年八月)。

- (11) ①については、岩佐美代子『風雅和歌集全注釈』下巻(笠間書院、二〇〇四年)が参考として挙げる。
- (12) 岩佐氏注(11) 前掲書。
- (13) 後朱雀院崩御後、弁乳母と交わした贈答歌の返歌で、『榮花物語』根合に上句を「思ひやれ同じ煙にまじりなで」として見える。なお、『新古今集』ではこの贈答は八二〇の紫式部詠の次に並んでいる。
- (14) 岩佐氏注(11) 前掲書はこの源三位詠を参考として挙げる。
- (15) 石澤智子『性助法親王の歌壇——道洪法師と法眼行済を中心に——』(『成蹊国文』三二、一九九八年三月)。
- (16) 石澤氏注(15) 論文で指摘されている。
- (17) 寺本直彦『源氏物語受容史論考』正編(風間書房、一九七〇年)七〇六頁以下。
- (18) 中川博夫『藤原能清について(上)——関東祇候の廷臣歌人達(三)——』(『中世文学研究』一九九二年八月) および「藤原能清について(下)——関東祇候の廷臣歌人達(三)——」(同・一九九三年八月)。
- (19) 久保田淳「順教房寂恵について」(『国語と国文学』一九五八年十一月)。
- (20) 以下、二首の源氏取りについては、和歌文学大系『新続古今和歌集』(村尾誠一校注、明治書院、二〇〇一年)に指摘がある。
- (21) 和歌文学大系『続拾遺和歌集』(小林一彦校注、明治書院、二〇〇二年)も柏木巻の歌を参考として挙げる。
- (22) 成立については、井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』改訂新版(明治書院、一九八七年)六九六～七〇〇頁参照。
- (23) 川田順「定本吉野朝の悲歌」(第一書房、一九三九年)二五五～二五六、四一〇～四一一頁。以下、川田氏の引用はこの書による。
- (24) 小木喬『新葉和歌集 本文と研究』(笠間書院、一九八四年)研究篇・論考5「吉野に逝去の宗良親王御子」。以下、小木氏の引用はこの論考による。なお、安井久善『宗良親王の研究』(笠間書院、一九九三年)一九六～一九九頁が川田・小木両氏の説を紹介、検討している。
- (25) 『十訓抄』第十ノ十四、『古今著聞集』巻五・和歌第六、『沙石集』巻第五末ノ一、『無名草子』等に見える。『続詞花集』哀傷部では読人不知詠で、死んだ娘が生き返って父母に向かつて詠んだ歌とし、初二句を「しでの山こゆべきかたも」として載る。

(26) 村上忠順著・品田太吉補『頭註新葉和歌集』（改造社、一九三六年）や川田氏、小木氏が指摘している。

(27) 本文は井上宗雄・田村柳亭編『中世百首歌二』（古典文庫 所収の第二類本による）。

(28) 伊藤伸江『「新葉和歌集」の哀傷歌——哀悼の小宇宙——』（『愛知県立大学文学部論集』国文学科編、五六号、二〇〇八年三月）。

(29) 井上氏注（22）前掲書七〇三〜七〇四頁。

(30) 引用は井上氏注（22）前掲書七一六頁記載の翻刻による。なお、井上説に従い、消息の筆者を宗良親王、文中の「御兄弟」を長親と師兼とする。

(31) 寺本直彦『源氏物語論考 古注釈・受容』（風間書房、一九八九年）三二一〜三五三頁。

(32) 寺本氏注（31）前掲書。

(33) 三田村雅子『記憶の中の源氏物語』（新潮社、二〇〇八年）二四九〜二五九頁。

(34) 加藤洋介「後醍醐天皇と源氏物語——『河海抄』延喜天曆准拠説の成立をめぐって——」（『日本文学』一九九〇年三月）、日向一雅「『河海抄』の源氏物語——順徳院と後醍醐天皇を媒介として——」（『文学』二〇〇三年七月）。

(35) 岩坪健『源氏物語古注釈の研究』（和泉書院、一九九九年）、深津睦夫「長慶天皇の文学環境」（『日本文学』二〇〇九年七月）。

(36) 深津睦夫・君嶋亜紀校注、明治書院、二〇一四年。後掲歌番号のうち四四〇は同書で言及されていないものだが、「露のゆかり」の語を詠み込むもので数に入れた。

*和歌の引用は、『新古今集』は新日本古典文学大系に、『新葉集』は和歌文学大系に、他の歌集および歌番号は、とくにことわりがない限り『新編国歌大観』による（漢字は適宜当てた）。その他本文の引用は、『源氏物語』は新編日本古典文学全集に、『源家長日記』は『源家長日記 校本・研究・総索引』に、『明月記』は河出書房新社『訓読明月記』に、『無名草子』は新潮日本古典集成に、『八雲御抄』は日本歌学大系による。南朝の記事には南朝の年号を用いた。